①Fool & Elf 馬鹿と妖精

サンプル

チルノが高熱を出して倒れた。梅雨の雨雲を太陽が蹴散らして少し、まぶしい光が降り注ぐ、熱い夏の日のことだった。

氷の妖精であるチルノが夏に倒れるということは、別に不思議なことではないかもしれない。しかし普段のチルノは、夏であろうが冬であろうが関係なく、元気いっぱいに飛び回る健康優良児である。

むしろ夏は、暑い暑いと言いながらも文字通り身を焦がす日の光を恨むことなく、日が暮れるまで遊び呆けるのが常だった。日中が長い夏を喜ぶ里の子どもたちと同じで、夏は遊ぶ季節なのである。

その元気の塊であるチルノが倒れたという。

妖精や妖怪といった類いの幻想郷の住民は、基本的に独立志向が強い。見た目は子ども

であっても、人間よりも強力な力を秘めた者もいる。だから子どもであっても一人住まいを構えて、生活している者も多くいる。

チルノもまたそんな妖精の一人であった。一人で暮らすチルノにとって、独りきりで倒れるということは致命的な出来事であった。ただ、悪戯好きで健全な女子であるチルノには、多くの友達がいたのが救いだった。

その中の一人、一番の親友である大妖精は、チルノが倒れたその日から熱心に看病を続けていた。他にも遊び仲間が時間を見つけては、大妖精を手伝いに来ていたが、彼女は付きっきりでチルノの傍にいた。

だがそんな献身的な看病をよそに、チルノの容体は一向によくならない。ただの夏風邪かと思っていたのだが、熱以外の風邪の症状は見受けられず、体中にいぼが斑状にできるというような症状も出始めている。意識はあるものの、言葉のやりとりはうまくいかず、寝たきりが続く。

大妖精たちには、独立して生活するだけの術はあったのだが、その知識だけではどうにもならなかった。大妖精にしても、他の仲間にしても、所詮子どもであったのだ。

「チルノちゃんは、どうなんですか」

大妖精は恐る恐る口を開いた。心配そうに立ち尽くす大妖精の前で、八雲藍がチルノの診察をしていた。

湖の近くにある丘にくり抜かれたチルノの住処。やや薄暗い家の中で、ランプの炎が踊る。炎の揺らめきは、大妖精の不安定な心を表しているかのように、せわしなく光を放っていた。

自分の力では、解決できないとわかった大妖精は、同じくお見舞いに来ていた化け猫の橙に相談を持ちかけた。橙には、化け狐の保護者がいた。それが八雲藍である。高名な妖怪の賢者の下で使役される藍は、チルノの遊び友達の間では、厳しいところは有るものの、頼りがいのあるお姉さんとして親しまれていた。

そして、愛娘である橙のお願いもあって、藍は二つ返事でこの湖の家を訪れていた。

九尾という大妖であることを感じさせない柔和な瞳も、今はいつになく真剣なまなざしに変わっていた。細めた眼光は鋭く、正体が狐である事を暗示させる。付き従った橙も、やんちゃな生娘なそれではなく、藍を助ける忠実な式神を演じていた。

触診をしていた腕を静かに降ろして、藍は大妖精を振り返った。その顔はやはり厳しいままで、事態が深刻なものであるということが伝わってきた。

「……これは病ではないな。蝦蟇を媒介にした蟲毒の一種――これは呪いの類いだ」

「呪い……ですか？」

藍の言葉に、喉が詰まる。

「心当たりがあるようだね」
「……えぇ、よく蛙を凍らせて遊んでいましたから」
「そうか」
大妖精の脳裏には、蛙で遊ぶチルノの姿が浮かんでいた。それはチルノの悪癖であった。
そのせいもあって大蝦蟇に呑まれかけたこともある。大妖精自身も注意はしたのだが、あまり聞いてはくれないチルノ。そんなチルノにいつか良くないことが起こるというのは、薄々感じていたことだ。
こんなことになるなら、もっと強く止めておけばよかった、と大妖精は後悔した。しかし、それで現状がよくなるわけでもない。問題は、この呪いが解けるものであるかどうかなのだ。

「それで、その呪いは治るんですか」
「現段階では何とも。病とは違って解呪をしなくてはならないのだが。宿主である蝦蟇も、術者も分からない以上、それは難しいだろうな
とにかく、紫様にも力添えを頼むことにしてみよう。ただ紫様はお忙しい身、少し時間がかかってしまうかもしれないのだが」
「いえ、見てもらえるだけでも助かります」
「すまないな」

藍の伏した眼には、力が及ばないことに対する無念さが滲み出ていて、より一層大妖精の不安を煽る。橙は項垂れる大妖精の肩をそっと抱いて、悲しみを慰めた。

「藍さん、ちぃちゃん。今日はありがとうございました」

反響した声が、空しく洞窟に響いた。

■■